
吉田君の高校生活

いいですとも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吉田君の高校生活

【Nコード】

N4309J

【作者名】

いいですとも

【あらすじ】

水無月高校に入学したての吉田君は、この高校でどんな生活を送るのか！

吉田君の数少ない長所は足の速さ！

周りに、何故か優秀な人間が集まる吉田君の高校生活が始まる！

足の速い吉田君（前書き）

処女作です。

よろしくお願いします。

足の速い吉田君

今、俺は捕まっている。

人数は多分5人くらいだ。

場所は、駅の近くで滅多に人が通らない道だ。

何故かだつて？

それは俺にも分からない。それが分かれば俺もこんなに悩んでいない。

俺、吉田甲一は他の人から見ても多分普通の高校生だ。

成績は中の上。運動神経は並。ルックスも多分普通だ。

そんな俺は、今日の1時から友達と喫茶店で会う約束していた。

それだけなのに、何故こんな仕打ちを受けなければならぬ！！

「何故お前が今、こういう状況に置かれているかが分かるか？」

俺を捕まえた奴らの一人がいきなり話しかけてきた。

俺は全く身に覚えが無いので、それを伝えようとすると

「それはなあ、

俺が狙つてた女がお前に惚れてたからだ！！！」

自分から聞いてきたのに、自分で答えやがった。

しかも、俺を捕まえた理由がどうでもいい理由だから余計に腹が立つ。

俺は自分を掴んでいる奴が、少し力を緩めている事に気づいた。

俺は自分を掴んでいる奴を思いつき蹴り、奴らが怯んでいる間に走って逃げた。

後ろから大きな声を出しながら追いかけてくる奴らが、諦めるまでの5分間を本気で走った。

久しぶりに本気で走ったので、息が上がった。

「昔だったらもう少し大丈夫だったのになあ。」

吉田甲一は他の運動神経は並だが、走ることだけは速かった。

親に小さい頃から、体力作りという事で走らされていたからかも知れない。

中学では友達から勧められて、陸上部に入ったが大会の前日にいつも怪我をしていたため、大会には出られなかった。

高校では特に陸上部に入る理由も無いので、陸上部には入らなかった。

そんな足が速い吉田甲一の物語

足の速い吉田君（後書き）

文法におかしいところや読みにくいところがあったら、教えてください。

感想を待っています。

友達（前書き）

修正しました

友達

八つ当たりをしてきた奴らから逃げ切った俺は、駅の近くの大通りの喫茶店に入った。

「甲ちゃん遅い！」

大きな声をした方を向くと、そこには腕を組んだ幼稚園からの幼なじみがいた。

名前は森本宇美

性別は女

頭脳明晰、容姿淡麗

人当たりも良く、男女共に人気がある優等生

こんな幼なじみを持った所為で、俺は色んな所で対比され、あらゆる疎まれる。

そんなに嫌なら突き放せば良いと言いかもしれないが、奴は妙に俺に懐いているため突き放すにも突き放せないという状況だ。こいつを突き放したら、俺は今以上の差別を受けてしまう。

だから人間関係は面倒くさい。

それにこんなことを言っているが、俺自身もこいつを凄い気に入っている。

幼なじみの他にも、ニヤニヤ笑いながらこちらを見ている小学校からの友人である完璧超人、坂上将吾

同じようにニヤニヤ笑っている中学校の時から友人の運動バカ、川口真知

さらにこちらを見向きもしないで、ただただゲームをしているのは、高校で趣味が合い、つるむようになったゲームオタク、下多田他打志がいた。

「店内で大声出すな。あと甲ちゃんって言うの止める。」

「甲ちゃんはずれないなあ。」

「魚じゃないからな。」

「つまらないよ……」

どうでもいい会話をしながら、俺は4人の友人がいる座席に向かって歩き、席につく。

「籍につくの間違いだろ。」

「坂上君！？、君は何を言っているのかな！？」

いきなり変なことを言い出した坂上には、流石の俺もビックリだ。ていうか、ナチュラルに心読まれてるし……

「いや、口に出してたぞ。」

「マジで！？、いや嘘だろ。さり気なく今も心読まれたし……」

「坂上甲……、なかなか良い名だな……」

「さり気なく俺の籍をお前の所に入れるな！、しかも、俺とお前は男同士だ！」

「愛があれば関係ない。」

「愛なんてない……」

「当たり前だ……」

「何怒ってるだよ……、もうお前口を閉じろ……」

「フフフ、甘いな……」

「腹話術だ！？」「こいつと話しているとマジで疲れる……」

流石完璧超人。俺のからかい方も完璧だということか…

俺をからかうのは満足したのか坂上は森本と川口と話していた。
凄い平和な会話だ…

さつきまでの俺との会話は何だったんだ…

ていうかさつきから下多田は一言も喋ってねえな…
気になって下多田の方を向く。

「下多田、お前さつきから何のゲームをつ…!？」

言葉が詰まった。

当然だ…、何故なら下多田が星形の眼鏡を掛けていたのだから…

「何…?」

下多田が澄ました顔でこちらを向いてくる。

「い、いや…」

俺は戸惑っている。そりゃ戸惑うよ。ていうか他の奴はなんで平然
としてるんだ?、俺がおかしいのか?

、いや待て、こいつの趣味が悪いんじゃない、ボケてるだけの可
能性もある。

なら突っ込めば…、いやダメだ…。こいつの趣味がリアルに悪かつ
たら傷つけることになってしまう…。

高校生活が始まって、まだ一週間と経っていない…。ようするに下
多田とは、知り合って間もないということだ…。

俺は短い時間でその人を理解出来るほど、出来た人間じゃない…。
ここは穩便に…

「か、格好いい眼鏡だな…」

下多田は俺に微笑みかけながら「ふふっ」と笑う。

「趣味悪いね…」

「分かってんならかけてくんないよ!!」

やっぱりボケてやがった…。

「甲ちゃんうるさい!」

向かいに座る森本が俺に向かって叫ぶ。

「お前も今、大声出してるだろうが…」

「ちゃんと反省しなさい!」

「へいへい、反省してますよ…」

「昔みたいに私のことを、宇美ちゃんって呼びなさい!」

「今それ関係ないよね!?!」

ジャンプ漫画のリボン並の急激な方向転換に、流石の俺もビックリだ。

ちなみに俺はリング争奪戦が一番好きだ。

あ、そういえば

「おい森本…」

「うん?、何?」

「お前、告白断る理由に、また俺を使っただろ…」

「うん…」

そう、こいつは告白を断る理由に俺を使うのだ。

こいつが断る理由に俺を使う所為で、俺は嫉妬されたり、はぶられたりなど散々な目にあう。「もしかして、また迷惑かけちゃった…？」

ああ、しまった…

こんなことになるんだったら、言うんじゃない…
罪悪感を感じた俺は、嘘を吐くことにした。

「いや、ちょっと噂で聞いたんだよ。入学早々告白して振られたって奴の噂を。だからもし告られたのがお前なら、俺を理由に断ってるだろうなと思ってさ。何も起きてないよ。」

それを聞くと森本はとても安心した様な顔をした。

「良かったあ…。また迷惑かけちゃったかと思った…」

「またしつこく言い寄られたのか？」

「うん…。そういう人達は他に好きな人がいるとでも言わないと、引いてくれなくて…。他の人の名前を出すと、その人が勘違いして告白してきたりするし…」

「何も起きてないから落ち込むなって…」

正直言って、こいつが元気が無いと俺は調子が狂う。

だからこいつには出来るだけ、元気でいて欲しいんだが…

「これからも断る理由に俺を使っても大丈夫だぜ。むしろ使ってくれないとこっちの気が狂っちゃう。」

かなり強引だが、森本は一応納得してくれたのか、「ありがとう…」とだけ言い、黙ってしまった…

「はいはい、みんな揃ったしそろそろ本題に入るからね。」

俺と森本が、気まずい雰囲気を漂わしていると、川口が話を切り替え、なんとか場の空気を戻してくれた。

流石は姉御肌…

こういうときの川口は、本当に凄い人材なんだと実感させてくれる。

「吉田君は何か頼むかい？」

「うーん…、いつ頃店を出す？」

「そろそろかな？」

「じゃあいいや。」

長居しないんだったら注文を頼んでも意味ないし。

「で、今日はどこに行くんだ？」

隣にいる坂上がかつたるそうに川口に聞く。

「今日は三人に、私たちの服選びを手伝って欲しいんだ。」

それを聞いて俺はブルーな気持ちになり、ため息を吐く。

「今日もの間違いだろ…」

「ようするに荷物持ちですか…」

坂上の更に奥にいる下多田も俺と同じで、ブルーな気持ちらしい。

「三人共ごめんね…」森本が本当に申し訳なさそうに俺たちに謝罪してくる。

「まあいいさ。さっさと終わらして、みんなでゲーセンにでも行く
うぜ。」

俺も坂上と同意見だ。

みんなも坂上と同意見なのか、さっさと立ち上がり会計を済ませ、
店の外へ出ていった。

友達（後書き）

おかしなところがあれば教えて下さい
お願いします

下多田他打志（前書き）

坂上と川口が出しにくい…

下多田他打志

俺らは喫茶店から徒歩で約30分の、大型デパートについた。

「やっとついたねえ。私疲れちゃったよ。今そっちに行くね、パトラッシュ…」

「確かに少し距離はあったけど、死ぬほど疲れてる訳無いだろ。」

そう言つて俺は森本の頭に軽くチョップをする。

「あはは、バレちゃった？」

「当たり前だろ、ていうかなんで自転車じゃなくて、歩きなんだよ。」

「…なんとなく？、ていうか怒ったみたいな口調で言ってるけど、口元が笑ってるぞ」

「う、うるせえ…」

まさか森本にまでからかわれるとは…

「はあはあ…」

なんか隣から長距離走大会を走り切った後みたいな息づかいが聞こえる…

「え、下多田君大丈夫!？」「ちょ、お前凄い汗じゃないか!！」

こいつマジでやべえぞ…

「はあはあ…、吉田くん…」

「な、なんだ、苦しいのか!？」「僕、やったよ…」
「何を!？」

その後、焦ってテンパっていた俺と森本とは裏腹に、冷静に行動をして、冷たい水と水で冷やしたタオルを持ってきてくれた坂上と川口のお陰で、下多田は一命を取り留めた…
今回の事件で、下多田の身体がとても弱いことが分かった…

「まったく、無茶すんなよ…」

「ていうか、なんで誰も気付かなかったんだろ…」

「気付かれないようにしてたから…」

「気付かれないように…って…」それだけで誰も気付かないようなものなんだろうか…

「みんな、ごめんね…」

「まあ、俺と森本は何もしてないけどな…」

「ね…」

「まああたしは、部活でこういうの慣れてるしね…」

流石はバスケット部期待の新生…

「俺も中学校で慣れてるはずなんだが、何も出来なかったぞ…。そういや坂本も冷静に行動してたな。どうして？」

「…なんとなく？」

「相変わらずだな…」

マジパネエ…

「本当にごめんなさい…」

「ていうかさつきから、なんで謝ってんの？」

「迷惑かけちゃったから……」

「気にすることねえだろ。なあ？」

俺が後ろを向いたらみんなが頷く。

「みんな優しいんだね…」

「普通じゃね？、ていうかこちらこそ、気づけなくてごめんな……」

「うっん、大丈夫…、みんな、ありがとう……」

そう言つて下多田は笑った。

思えば、これが初めて下多田が、俺たちの前で笑った瞬間だった。

デパートに入つて歩くこと5分、俺らは2階の洋服屋についた。

「俺らは外で待つてるから、お前らは服買つて来いよ。」

「ん、分かった。だけど坂上は連れて行って良いか？」

「なんで？」

「あたしの服を選んで貰うんだよ。こいつ、男の癖に何故かセンス良いし……」

「そっぴやそうだな…、森本は選んで貰わないのか？」

「私は良いよ…、人に服選んで貰うのって恥ずかしいし……」

「そっか？、俺はいつも店員任せだぞ。」

「私は違うの！」

「別に怒鳴んなくても…、まあ坂上は、煮るなり焼くなり好きに使つてくれよ。」

「おい、俺は行くとは言つてないぞ。」

「あんがと。」

「…俺に否定する権利はないのか？」

「え？、お前に人権なんて必要ないだろ？」

「必要だよ！」

「へえ。まあ川口待たせんのも悪いから、早よ行け。」

「てめえ、昼の仕返しか…」

そう言つて坂上は川口と一緒に店内に入つていった。

…やっぱりあいつ、なんだかんだ言つて良い奴だ。

「ん、じゃあ私も行つてくるね！」

「おう、行つてらっしゃい。」「うん、行つて来ます！」

そして森本は、洋服屋の中に入つていった。

「下多田、座るか？」

「うん…」

そう言つて俺らは、洋服屋の前のベンチに座つた。

下多田の様子は…

うん、顔色も悪くないし大丈夫そうだな…

だけど、こいつの虚弱体質はどうにかならないものか…

あ、そうだ…

「なあ下多田。」

「何？」

「一緒に体力作りする気はねえか？」

「え…？」

「毎朝一緒にランニングをするんだよ。そうすりゃお前にも体力はつくと思つし、俺もそろそろ体力を戻さないといけないしな。」

「でも、僕は遅いから、ついていけないよ…」

「大丈夫。ペースは合わせるさ。」

「そんなことしたら、体力作りに、ならないでしょ…？」

「大丈夫だよ。別に俺は急いで戻そうとしてる訳じゃないし。それに、お前に体力がついてくれば、ペースも上げられるしな…」

「そっか…、じゃあ、お言葉に甘えても、良いかな…？」

「勿論だ！」

良かった良かった、やっと納得してくれたか。

このままの体力だったら、下多田も苦勞するだろうしな。

あ、そうだ…

「お前っていつも、体育の授業の時とかどうしてたんだ？」

「いつも見学だったよ…、それに体育祭とかにも出たことがないんだ…」

え…？

「それって教師達は容認してるのか…？」

「うん…、成績が良いから、とか言ってたよ…」

「もしかして、テストの順位毎回一位…？」

「凄い…、よく分かったね…」「全教科、毎回百点…？」

「本当に凄い…、もしかして、超能力者…？」

「そうだったら良いね…、違うけど…」

「…？」

「いや、俺の周りって、何故か凄い人間が集まるんだよ。本当にどうしてなんだろうなあ…」

お陰で俺は、毎日楽しく過ごせている。

まあその所為で、周りから疎外されたりもするんだけど…

「僕は、…………、ない…」

「ん？、なんて言っただ？」

「僕は優秀な人間なんかじゃない…、…だって僕は、君と出会っただけで、友達がいなかったんだから…」

え…？

「ど、どうして…」

「先生達に、一人だけ、優遇されてたからかも、しれないし、ただ単純に、僕が、嫌われてたからしれない…」

「き、教師は…」

「僕は別に、イジメは、受けてないよ…、問題は、起きてないんだから、先生達も動けない…、ようするに、ただ、僕がクラスに、いや、学校に、馴染めなかった、だけなんだよ…」

「お前から話しかけたりは…」

「一応したけど、やっぱり、逃げられちゃった…」

「そっ…か…」

俺は後悔していた。こんな話題を振ってしまったこと。下多田にこんな話をさせてしまったこと。そして、昔の俺が、昔のこいつに会って、昔のこいつを助けられなかったことを。

そんなことを考えている俺の顔を見て、下多田が口を開いた。

「今更、こんなことを言っても、信じて貰えないかもだけど、僕、君に感謝してるんだ…」

え…？

「どうしてだよ…、俺は昔のお前に何も出来なかったんだぜ…？」
「それは、どうしようもないよ…、出会ってすら、いなかったんだ…、そんなことで、悩むのは、おかしいよ…」
「…」

「それに、今の僕は、君に、助けられたんだ…、君に話しかけられて、僕は救われた…」

「俺が話しかけなくても、きっと他の奴が話しかけたさ…」

「それはないよ…、世間には、話しかけづらい空気の人って、いるじゃないか…」

「それが…？」

「僕が発している空気は、その究極系、らしいんだ…、年が、離れてたりすると、通じにくい、らしいんだけど、同級生とかには、ダイレクトで、通じちゃうみたい…」

「そうなのか…」

あれ…？

「じゃあ、なんで俺には…」

「きつと君も、僕と同じように、だけど、僕とは、違う種類の、特殊な空気を、出しているんだよ…」

「マジで…？」

「ほら、さっき、優秀な人間が、集まってくるって、言ってたじゃないか…」

「それが原因なの…？」

「分からない、けどね…」

そついうと下多田は笑う。俺もつられて笑う。

「やっと、吉田君、元気になった…」

「気遣わせちゃったか…、ごめんな。それでもって、話してくれて、

ありがとう。」

「うん！」

「みんなには、話すか…？」

「今はまだ、話せないけど、近い内に、話すつもり…」
「そっか…」

流石にそこまでは出来ないか…

「ねえ、吉田君…」

「なんだ？」

「僕達、もう友達、だよ…？」

「当たり前だろ！」

そして俺達は、どちらからという訳でもなく、一緒に、笑った。

下多田他打志（後書き）

文法におかしな所や、読みにくい所、誤字があつたら教えて下さい。
感想待ってます。

幼なじみ（前書き）

キャラが定まりません…

坂上と川口が出せません…

学校がまだ一度も出せてません…

幼なじみ

俺と下多田がベンチに座りながら談笑していると、森本が肩を落としてこっちに、歩いて来ていた。

「ん、もう服買ったのか？」

「買ってないよ…、良い服は見つかったんだけどさ…」

「…高いのか？」

「うん…」

珍しく本気で残念そうな顔をしているな…

「こ、甲ちゃん…」

「なんだ？」

「か、買って欲しいな…」

「俺になんのメリットもないだろ…」

「えー…と、私の喜ぶ姿が見れる！」

「俺になんのメリットもないだろ…、俺になんのメリットもないだろ…」

大事なことから、二回言いました。

「そんなに言うなんて酷いよ…」

「ていうか下多田には聞かないのかよ。」

「なんかそれは悪いって言うか…」

「俺に対しては悪くないのかよ…」

ちょっとカルチャーショックだ。

カルチャーは関係ないけど。

「そういう訳じゃないけど…」

「分かってるから大丈夫だよ。ちょっとからかっただけ。ていうか、分かってると思うけど、さっき俺が言ったやつも冗談だからな。」

「分かってるよ…」

そりゃなによりだ。

「…吉田君、買ってあげないの？」

「いや、買ってあげたいんだけどな…、一応聞いてみるけど、何円だった？」

「…8000円」

「…一着で？」

「うん…」

やはりバイトをしていない俺や森本には難しい値段だ…

「悪いな…」

「なんで謝るの…？、甲ちゃんは何も悪くないよ…。悪いのは自分勝手な私と、この世界だよ…」

「その年で何を悟ってるんだ…？」

「下多田君も迷惑かけちゃってごめんね…」

「いや、それは良いんだけど、なんでどっちかが一方的に払うってことになってるの…？」

へ？

「どういうことだ…」

「いや、だから割り勘にすれば良いんじゃないの…？」

「「あ……」」

こいつ……やはり天才……！！

「凄い……、凄いよ下多田君！」

「お前……、俺、感動したよ！」

「……………、お褒めに預かり光栄です……」

何故か下多田に、とてつもなく悲しそうな目で見られた。

「そうと決まれば割り勘だ！」

「あ……、でもやっぱり良いよ……」

「ん？、なんで？」

「だってやっぱり甲ちゃんには、何もメリットがないもん……」

ん？、何言ってるんだこいつ。

「何さっきの言葉を、真に受けてんだよ。別に良いんだよ。困った時はお互い様。幼なじみだろ？ だから、俺が困ってたら力になってくれよ。」

それでも森本は納得しない。

呆れるくらい頑固だ。

「まったく、頑固だな。お前はベリー頑固だ。が○こちゃんだ。」

「ちゃんと隠すんだ……」

「勿論だ。」

ヤバイ、話が逸れた。

「まあ要するに、俺とお前の中なんだから、気にすることは無いってことだ。」

「そうだね…、一夜を共に過ごした仲だもんね…」

「言い方を変えろ。ここはお昼のデパートだ。子供が沢山いる。教育に悪い。」

「同じ子供なのに…、自分は大人みたいに言っちゃって…」

「…なんで俺は責められてるんだ？」

それこそ同じ子供なのに…

「まあいいや…、半分ずつだから4000円か…。それでも地味に高いな…」

「うん…、ごめ「謝んなくて良いから」…、はい…」

「僕も払うよ…？」

その気持ちは嬉しいけど…

「大丈夫だよ。」

あ、ハモった。

「…？ どうして…？」

なんて言えば良いんだろ…

「私と甲ちゃんの中での友達と幼なじみの違いだよ。」

あ、元気になってる。

「どづいこと…？」

「友達と一緒に遊ぶ、大事な人。幼なじみは家族みたいな、大事な人。」

「なんて言えば良いんだろうな。良く分かんねえや。」

「そっか…。じゃあ、二人の幼なじみの基準は…？」

「幼稚園からずっと一緒に遊んでる人。」

「それ、一人しかないんじゃないの…？」

「それもそうだな（ね）！」

そう言っただけで三人は笑った。

「じゃあ、僕はお金を出さないよ…？」

「ああ、悪いな。」

「大丈夫だよ。じゃあ、坂上君と川口さんが戻ってきたら、二人は森本さんの服を買っているって、伝えておくね…」

「うん、ありがとね！」

そう言っただけで森本は洋服屋に入っていく。

「で、どれが欲しいんだ？」

「これだよ！」

そう言う森本が持っている服は、簡単に言えば白いワンピースだった。

ONE PIECEではない。

因みに俺は、アローンの所が一番好きだ。

話が逸れたが、その白いワンピースは、シンプルではあるが所々に地味ながらもお洒落な装飾が付いており、派手すぎず地味すぎず、とても良い服だと思う。

何より、森本にとっても良く似合いそうだ。

少し時期が早いような気もするけどね。

「良いんじゃないか？ センス良いと俺は思う。」

「良かったあ…、ちょっと試着してくるから、感想聞かせて！」
「おう！」

そして、森本が更衣室に入ったので、俺は森本が出てくるのを、近くの椅子に腰掛けながら待つことにした。

座ってから間もなく、更衣室のカーテンが開き、森本の姿が見える。

森本の姿はとても可愛らしかった。

その森本の姿は可愛らしいだけではなく、美しくもあった。

「どう…、かな…？」

「あ、ああ…、凄い良いぞ…」

「ほ、ほんと…？」

「ああ…」

「…、可愛いかな…？」

少し恥ずかしいが、森本も相当恥ずかしいはずだ…
正直に答えないと…

「す、凄い可愛い…」

「こ、この服、買ってくる！」

森本はそう言うので、すぐに着替え、俺と一緒に会計を済ませた。

「ま、まさか、答えを返してくれるとは思わなかったよ…」

「悪いかよ…」

「全然悪くないよ！」

「あ、そう…」

今、思い返すと恥ずかしい…

だが、森本も恥ずかしいはずだから、これ以上話を盛り返すこともないだろう。

そうして、俺と森本のドキドキショッピングは幕を下ろしたのである…

幼なじみ（後書き）

文法におかしな所や読みにくい所があったら教えてください。
感想お待ちしています。

ゲーム（前書き）

見苦しいかもしれませんが、よろしく願います

ゲーム

服を買い終えた俺と森本は、みんなと合流し、三回のゲーセンに向かった。

「私、ゲーセンは久しぶりだなあ…」

「あたしも！最近部活が忙しくて…」

女子二人はゲーセンが久しぶりらしい。

「俺たちは最近来たよな！」

「ああ。ていうか週に一回は来てるしね。」

「多いよねえ…」

「下多田君は？」

「僕は…、初めて…」

『初めて！！？』

下多田は、今までゲーセンに行ったことがないという衝撃の事実が発覚した…

「うわあ…可愛いなあ…」

ゲーセンに入って早々に、森本はクレーンゲームの人形に目が奪われている。

「来る度にそうなるよな…」

「ね、ねえ甲ちゃん…」

「クレーンゲームはやらないぞ」「ど、どうして…」

「だってどうせ取れないもん」

「それをどうにかしてよ！」

「無理。ゆるゆるだもん」

「ううゝ…」

森本は放っておいて…

川口は…

「ううゝ…」

あいつもクレールゲームか…

「おい吉田、ガンダムやろうぜ！」

「それは良いけど、下多田はどこ？」

「ああ、あいつならあそこ」

そういつて坂上が指を指した先には、鉄拳をしている下多田がいた。
ハイテンションな…

「フハハハハハ！…！！」

ゲームの方かというと、反対側の台の人を圧倒的な力で捻り潰していた…

「…圧倒的だな」

「ああ…あそこまで行くと清々しいな…」

「せっかくだから俺は、この赤の機体を使っぜ！」

そういつて坂上を選んだのは、マスターガンダムだった。

「えーと俺は」

「ねえねえ、赤くないだろってツッコミは？ツッコミは？」

「よし、俺はこいつにしよう」

そう、例のGガンのノリみたいな機体を

『ハッシンスル！』

「なあ、吉田」

「どうした、偉く真面目な口調で」

『オレハナンデコンナトコロニイルンダロウ……』

「下多田の奴さ、少し変わったな」

「どうしてそう思うんだ…？」

何かあったのか…？

『モウヤメルンダ！』

「いや、なんて言えば良いのかな…」
「…」

『トウ！ヘアー！！』

「下多田っていつも遠慮してたじゃん…？」

「俺のことをからかったりしてたじゃん…」
さっきだって…

『イヤアアアアア！！』

「お前に対してはそうだったさ…でも、お前以外には喋るのだった
遠慮してた…お前だって気づいてたろ？」

「ああ」

気付かなかった…

『キラキラバシユウウン！！』

「でもさっきからあんまり遠慮しなくなったっていうか、他人行儀
じゃなくなったっていうか…とにかく距離が近くなった気がした！」

「そっか…良かったな！」
「おう！」

『ウワアアアア！！』

「随分と嬉しそつだな」

「吉田、口元がニヤケてるぞ」

なっ…！

「ニヒヒ！」

「デメエ…！」

後で殴つてやる…！

「まあ何にせよ、良かったな！」

「…ああ！」その後、俺たちはゲームを終わらせ、みんなと合流した。

「二人共…それ、どうしたの…？」

「下多田君が取ってくれたの！」

「私も…私は別に欲しくなかつただけどさ…」

二人が、さつき物欲しそつに眺めていた人形を持っていた為、どうやって手に入れたかを聞いてみたら、森本は嬉しそつに、川口は恥ずかしそつに答えてくれた。

「下多田…お前、ゲーセン来るの初めてだったよな…」

「うん…」

「あれ、どうやって取った」

「普通に…」

マジかよ…それじゃあもしかして…

「一発で…?」

「凄い…やっぱり超能力者…?」

「そうだったら良かったのにね…」

マジパネエ…

「坂上、あれと思う…」

「凄いな…格ゲーだったら、家でやり込んで納得出来るけど、
クレインゲームは…」

完璧超人すらも感心させるとは…やっぱり俺の周りには変な奴ばかり集まるな…

「下多田君は凄いよお！凄く凄いの！こ・う・ちゃ・ん・とは大違い!!」

「うん、そだね」

「む！」

同意したのに睨まれても…

「ふう…吉田君は、女心が、分かってないね…」

「なんかムカつく…」

「僕は女心が、凄く、良く分かってるよ！毎日、家で特訓を、しているからね！」

「ほう…どうやって…」

それは少し気になるな

「まず、テレビを、用意します」

「ふむふむ」

「次に、P S 2、または、P S 3を、用意します」

「む…？」

「そして、可愛い女の子が、いっぱい写ってる、ゲームを入れて、レッツスタート！」

「待て待て待て待て…！」

いや、途中から嫌な予感はしてたけどさ！

「なに？」

「なに？じゃねえよ！二次元の女と三次元の女を一緒にするな！」

「…盲点だった」

「バカか！？」

こいつはあてにならん…

「でも、本当に甲ちゃん女心が分かってない！」

「分かる気もないしな」

「酷い！」

「使いどころが無いし」

「分かってくれなきゃ私が悲しむ！」

「H A H A H A！」

「ウザい！」

実にからかいがいがあるな

他の人たちは…

「別に私はこんなの欲しくなかったんだよ！そう欲しくなかったの！でも、せっかく取ってくれたんだし、ねえ！」

「誰も聞いてねえよ」

「そんなことより、僕は、もう帰りたい…」

「だってよ。吉田、森本、帰るぞー」

「へーい」

「もう！」

そして俺たちはそれぞれ家に帰って行った。

ゲーム（後書き）

僕はいつもDXを使っています

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4309j/>

吉田君の高校生活

2011年11月14日22時08分発行